

聖ボニファチアス幼稚園

での一年

真野輝彦



カーニバル

1 幼稚園

一つの事実は他の事実との比較において、その特色が鮮明になると思います。私の職場の関係で長男(知彦)は本年四月お茶の水幼稚園に入園までの約三年間を米国(ニューヨーク)、と西独(フランクフルト)で過ごしました。以下主として西独での彼の幼稚園生活を私なりに日本でのそれと比較しつつ、読者の方々の若干の参考にでもなればと綴ってみました。

長男がかよったのはフランクフルトの住宅街にあるカトリック教会の付属幼稚園で、五十がらみの小柄な尼さんの園長先生以下四人の女子の先生が、二十四名ずつのクラスを組織し、時に教育実習の方も二、三名くらいずつ来られていました。

運動場はさほど広くはありませんでしたが、おすべり、ジャングルジム、小さな小屋等すべて木製で安全性にかなりの配慮がなされていました。

この幼稚園は特別の理由(両親が働いているなど)がないかぎり四歳児から入園を許されますが、長男の場合、(一)言葉を早く覚えさせること、(二)外国人で友だちが少ないことから、特に依頼して三歳で入園いたしました、そうでなく

ても大きいゲルマン人の中で体の小さな日本人は目立ちましたが、本人はさして違和感もなく過ごしたようです。年が小さかったのでむしろ自分の言いたいことが言えないとか、他人の言うことがわからないことが、そんな不自由がなかったのかかもしれません。他の日本人のお子さんで五歳ぐらいで入園すると、自分の言いたいことが言えないのや、幼稚園に行くのがいやだとダダこねられたという話を聞いたことがあります。それでも三ヶ月もすると、自分では話さないまでも、先生や友だちの言葉ことはほとんど理解していました。

登園時間は朝八時から八時半までに連れて行き、退園は原則として十二時、両親が働いている子ども、特別の事情ができた場合は、五時まで預かっていただけるという、一部保育所的な性質ももっていました。

毎日の幼稚園生活のプリンシブルは、子どもたちが両親の下でのプライベートの生活から、社会人に成長していく過程の指導、すなわちゲマインデの構成人としての個人が、他の個人といかに調和を保ちながら生活するかを教えることにありました。したがって特に定められた時間割があるわけではなく、他人に迷惑をかけなければ教室にいよいよが、外で遊ぼうが、一人でいようが、グループで遊ぼうがかま

わず、先生が注意するのはゲマインシャフトの調和を乱した時にかぎっていたようです。

この点に関してはお茶の水の方針と軌を一にしているとと思われます。入園第一日目を終えた長男に『日本の幼稚園はどうだ』との問を発しましたところ、『幼稚園だから日本もドイツも同じだよ。ただドイツの方が室にいる時でも外出遊ぶ時でも靴をはき替えないから、めんどくさくなかったね』という答えには、ふき出していました。

2 日記

次に幼稚園での一年間の出来事を日記をくりながら記してみましょう。

(一)六月十四日

午後八時 新入園児のための父兄の集り(出席は父親・母親半々程度)。入園手続き準備の注意あり。(1)入園以前にした予防注射とツベルクリン反応に関する証明書提出のこと。(口)通園カバン、雨、雪の日のための上着用意のこと。その他服装等は通常のもの。(ハ)食べ物、(甘いもの以外は何を持たせてもよい。園児がいつ食べるかは自由)

(二)八月十六日

幼稚園始まる。入園式等は一切なし。月謝納入(保育料

四〇 ドイツ・マルク、その他入園費等なし)

(二) 九月二十二日

秋の森へ散歩。水曜日。保育時間中。前日市電費用八〇ペニッヒ持たせるようにとのプリントによる指示あり。各クラス日をかえ担任の先生と園長先生指導。父兄付添なし。ドングリ、落葉拾いなど。

(四) 十月九日

オモチャ、絵本の展示、即売会。於教会。園長先生が中心となり、他の先生方が手伝いに来られていた。売上利益は教会への寄付。

(五) 十一月二十九日

夜八時より、父兄会。(イ)新役員選出。役員は一年間父兄を代表し、月一回、教会側と教会区父兄側の意見調整を行なう。役員は父親二名、母親二名。(ロ)クリスマスの過ごし方に関する意見交換。

(六) 十二月六日

午後三時～四時 St. Nikolaus Ferien (聖ニコラウス祭)

恵まれない子どもたちを招いてサンタクロースのお祭。プレゼント(もう使わなくなつたが、まだ使える玩具等をきれいに包んで)持参す。

(七) 十二月二十三日

母親へのクリスマスプレゼントとして幼稚園で作った花びん(模様は子どもに作らせる)と花びんしきにひいらぎの枝をさして持ち帰る。

(八) 十二月二十四日～一月一日

クリスマス休暇。

(九) 一月十四日～十五日

カーニバル。子どもたちはそれぞれ仮装姿で通園。男子はこの日だけ許されるカンシャク玉の入ったピストル姿のかウボーキ、インディアンが多い。(知彦一日目は日本のハッピ、二日目カウボーイ)

(十) 三月二十三日

飛行場見学。保育時間中。園長先生と三人の母親が付添い。新しく完成した、フランクフルト空港見学。動く廊下、ジャンボジェット機等。

(十一) 三月三十日

イースター。卵のカラ(中味をぬいたもの)に自分でできな色をぬり、木の枝にさげたものを作つて来て、幼稚園の庭にかくされた、お菓子のバスケット(先生手作り)を皆でさがし持ち帰る。

(十二) 四月十日

父兄会。子どもに対する体刑の是非について。時に必要と
というのが参加者のコンセンサスであった。

(四)五月十二日

十一時半～十二時。母の日。母親が園児を迎えて行く時間
を若干くり上げ、わずか十五分間ではあったが、子どもたち
が歌をうたい、子どもたちが先生の指導で前日に焼いたクッキーを母親にプレゼントする。

(五)六月十六日

フェヤウェル・パーティー。日本への帰国の知彦のため
にパーティを開いてくれる。同じクラスの園児が、自分の
絵を書き、切りぬいたものを、先生が幼稚園をバックには
り付け、名前を書き込んでくれる。園長先生は、いつも幼
稚園でかけていた、ドイツの子どもの歌のレコードを記念
にくださった。

(六)前記のほかに、担当の先生と話がしたい人は来てくだ
さいという、先生との面接日が、毎月第二水曜日にレザーブ
されていました。

3 一年間をふり返つて

『あなたは幼稚園（幼児教育）に何を期待されますか』。こ
れは三歳の長男の入園依頼のため、園長先生と面接した際

に問われ、以来二児の親としての私の脳裏をはなれない問題である。その時私は、『西独社会に早くとけこませ、小学校に進む準備をすることにある』と答えたが、園長先生の期待された正解は、既に述べた「個人をいかに社会人に育てるか、個人と社会といかに調和させるか」にあつたことは、長男の毎日の通園生活、担当訓導との面接で繰返し確認された。ナチズムという全体主義を高い犠牲を払って経験した歴史的背景もあるう。個人と社会との調和の問題は、まず個人を個人として認めることにその出発点を見いだす。その上に立つて個性をいかに社会生活とバランスさせるかの最初の場が幼稚園というわけである。大学生になつても、「学生だから」というあまやかしの生活態度私自身もかつて経験した)と比較し、冷汗の出る思いがする。

以上は聖ボニファチアス幼稚園での短い経験を基にしたものであり、これがドイツの幼稚園教育と考えるのはきわめて危険である。当然のことではあるが、あえて付言して、筆をおきたい。